

日本中國學會報 第七十五集  
二〇二三年十月七日 發行 拔刷

明刊本小説 『新刻彙正十八國鬪寶傳』 の發見とその意義

—— 伍子胥が主人公の「全相平話」が存在した可能性を視野に ——

# 明刊本小説『新刻彙正十八國鬪寶傳』の発見とその意義

——伍子胥が主人公の「全相平話」が存在した可能性を視野に——

一五二

上原究 一

## はじめに

春秋時代の伍子胥（字を以て行わる、名は員）が楚の平王に父と兄を不当に殺されて苦勞の末に呉に亡命し、呉王闔閭の腹心となつて楚を滅亡寸前まで追い込み、平王の屍に鞭打つて復讐を果たしたことや、その後の呉越の戦いでも活躍したこと、そして呉王夫差と仲違いして壯絶な最期を遂げたことは、『史記』『伍子胥列傳』に詳しいほか、『春秋左氏傳』『國語』『越絶書』『吳越春秋』などの史書にも見える。

『元明清の通俗文藝』では、その伍子胥がまだ楚に仕えていた若き日の活躍を描く、いわゆる臨潼鬪寶の物語が人氣を博していた。史書には見えない荒唐無稽な架空の話で、通俗文藝でも伍子胥の生涯を描いた唐代の敦煌寫本「伍子胥變文」(P.3213.S.6331.S.388P.2794v)にはまだ見えず、元雜劇「楚昭王疎者下船」の元刊本（中國國家圖書館藏）の昭王の唱で前日譚として觸れられるのが現存最古の姿とされる<sup>1)</sup>。また、明代の改編を経た『元曲選』（東京大學東洋文化研究所等藏）本しか残らない作品ではあるが、元雜劇「説縛諸伍員吹簫」の費無忌・費得雄・伍子胥の三者の白でも前日譚として觸れられている。この物語を主題

とする戯曲作品も、『脈望館鈔校本古今雜劇』（中國國家圖書館藏）の中に「十八國臨潼鬪寶」及びその前半を敷衍した改作「伍子胥鞭伏柳盜跖」の二作があるほか、南戲『舉鼎記』の鈔本（中國國家圖書館藏）も途中までだが現存する。明代の小説では萬曆以降の刊本が二系統傳わる『列國志傳』と崇禎十三年（一六四〇）序刊の『七十二朝人物演義』（國立公文書館内閣文庫等藏）卷十四「下莊子之勇」が、清代のテキストが残る語り物では首都圖書館藏車王府曲本に含まれる六部作の大長篇鈔本鼓詞『六部春秋』の第一部『左傳春秋』鼓詞が、この物語に多くの紙幅を割いている。一方で、臨潼鬪寶の物語は『列國志傳』を全面改訂して『新列國志』（内閣文庫等藏）を作った馮夢龍がその序で舊作の出鱈目な話の例として唯一挙げた上で本文から削除していたり、祁彪佳「遠山堂曲品」が南戲『舉鼎記』を史實を無視した「點金爲鐵」の駄作だと批判していたりと、あまりの荒唐無稽さによつて明末の時点で既に知識人からは敬遠されがちな話でもあった。

小松注(1)論文は、『列國志傳』は多くの部分が史書に依據して書かれていたものの、①八巻本の巻一全體、②八巻本の巻五「秦哀公設會圖霸」から「伍子胥戰震臨潼會」まで、③八巻本の巻七「魏徵龐涓下

雲夢」から「馬陵道萬箭死靡涓」まで、④八卷本の巻八「子噲傳位子之」から「潛王逃奔奔即墨」の前半まで、という四か所で史實を大きく逸脱すると指摘した上で(二七頁)、①は元の至治年間(二三二〜二三三)に刊行された「全相平話五種」(内閣文庫藏)の一つ「武王伐紂書」、②は「全相平話」シリーズとは異なる起源を持つより通俗的な臨潼鬪寶の物語、③は「全相平話五種」と同じシリーズの失われた作品「七國春秋前集」、④は「全相平話五種」の一つ「樂毅圖齊七國春秋後集」にそれぞれ基づいて書かれたと結論付ける(三四〜三五頁)。

小松氏の假説は刺激的かつ説得力のあるものだったが、想定されている「より通俗的な臨潼鬪寶の物語」が伝わっていないという憾みがあるため、こと③に関しては検証が難しかった。ところが、二〇二一年十一月に神保町で開かれた令和三年度東京古典會古籍展観大入札會に、それまで全く存在が知られていなかった、『新刻彙正十八國鬪寶傳』と題する明刊本の小説の残本が出品された。小松氏の想定していた物語との関連を思わせる題名のこの書物を、幸いにも筆者の研究經費で落札して東京大學東洋文化研究所に収めることが出来た。そこで本稿では、この新発見の明代小説の概略を紹介した上で、これを利用して小松説の検証や更に踏み込んだ考察を試みたい。

### 一、臨潼鬪寶の物語の概要

まずは従来知られていた作品群によって臨潼鬪寶の物語の概要を確認しておこう。『列國志傳』で描かれる展開は次の通りである。

①秦の哀公は子鍼(姓名は公孫后)の策に従い、各國が周王に献上する寶物を披露する鬪寶の會を口實に全國の十七諸侯を臨潼に招き、そのまま監禁して従わせようと圖る。(「秦哀公設會圖霸」則)

②楚の靈王はまだ十代の若き伍子胥を護衛に臨潼に向かう。吳の公子姬光が寶物の珊瑚枕を道中で柳展雄(盜賊)に奪われ、展雄は他の寶物も奪おうと諸侯の行く手を阻む。展雄討伐に向かった齊の公子姜鐸は逆に生け捕られ、道中で二頭の虎を退治してから挑んだ鄭の下莊も敗れて逃げ歸る。(「玄象岡下莊打虎」則)

③辯舌で展雄説得を試みた陳の大夫秋胡も失敗する。伍子胥が出馬し、展雄を諸侯の目の届かない所に誘導した上で生け捕って道理を説き、珊瑚枕と姜鐸を取り戻す。(「柳盜賊辱叱秋胡」則)

④十八諸侯が潼關に揃い、まず會を取り仕切る明輔の役を諸侯の臣下の中から選ぶことになる。鄭から虎退治の下莊、衛から龍殺しの公子嗣贖が志願するが、齊の大夫晏平仲(名は嬰)が明輔は文武兩道でなければ駄目だと進言し、題に應じた詩を詠むことと千斤の鼎を持ち上げて諸侯の座を一周することを要求する。秦の姬輦(子鍼の別名という扱い)がまず詩を獻じ、鼎もその場で何とか三尺ばかり持ち上げたが、伍子胥はより優れた詩を獻じた上で、鼎を左手一本で持ち上げて平然と諸侯の座を一周して見せ、明輔の座を勝ち取る。(「臨潼會子胥爭明輔」則)

⑤明輔となった伍子胥は寶物を持参しなかつた蔡・陳・楚を辯護し、秦の意圖に反して十八諸侯に對等の盟を結ばせる。哀公と子鍼は姬光が宴席で玉盞を割る粗相を犯したのを契機に兵を引き入れて諸侯を脅そうとするが、伍子胥に一喝されて引き下がる。伍子胥は子鍼を見送りに連れ出すことで秦の伏兵に襲われることも防ぎ、諸侯を無事歸國させる。(「伍子胥鎮臨潼會」則)

話の細部や登場する人名には前述の諸作品間で異同があり、例えば「十八國臨潼鬪寶」雜劇では、主に以下の諸點が異なっている。<sup>3)</sup>

・秦の君主が哀公ではなく穆公、謀臣が子鍼ではなく百里奚になっており、姫輦は百里奚とは別人の武官として登場する。  
 ・楚の君主が靈王ではなく平公（平王ではなく平公と表記されるのは、王號を避けていた内府本に由来するためと思われる）。  
 ・姫光の寶物を奪うのは柳展雄ではなく來皮豹という塗山の賊で、伍子胥がこれを退治した後で、改めて別に展雄が現れる。  
 ・姜鐸は登場せず、卞莊も鬪寶會には参加するが展雄とは戦わない。代わりに展雄は宋の桓公の配下の華茂という武將を殺す。  
 ・展雄が伍子胥に心服して義弟となる。  
 ・伍子胥らが争う役の名が「明輔」ではなく「盟府」という表記になっている。これは他に「明甫」に作る作品もある。  
 ・盟府の座を争う競技は鼎の勝負が先で、卞莊・蒯聵・姫輦・伍子胥の順に挑む。その後で伍子胥が謎掛けの勝負で百里奚に勝つ。  
 ・伍子胥が秦の無祥公主と楚の太子芊建の縁談をまとめる。

他の作品も含めた登場人物の出入りは表1の通りで、登場する人物の組み合わせは雑劇と小説とで分かれている。鬪寶會に臨席する平王〔公〕（小説では靈王）・穆公（小説では哀公）・百里奚（小説では子鍼）・姫輦・卞莊・蒯聵・姫光は雑劇でも小説でもほぼ常に同じ役回りで現れるが、晏嬰は小説二作にしか登場せず、逆に無祥公主は雑劇の一部にしか出ていない。また、鬪寶會の前に賊と戦う場面が描かれている作品では、柳展雄と秋胡は必ず登場し、加えて雑劇では來皮豹と華茂が、小説では姜鐸が登場している。なお、南戲『舉鼎記』には雑劇系と小説系の雙方の登場人物が揃って登場する。

表1に挙げた人物は、五人を除いて『史記』のどこかに名が見える<sup>⑤</sup>。『史記』に見えない五人のうち、秋胡は自分の妻をそれとは気がかず

表1 ○：同名で登場 △：別名で登場 ×：登場しない /：出て来るはずの場面自體ない ?：不明

	史書	雑劇						南戲	小説	
	史記	元刊本 楚昭王	脈望館本 楚昭王	元曲選本 楚昭王	元曲選本 伍員吹簫	脈望館本 臨潼鬪寶	脈望館本 鞭伏盜跖	鈔本 舉鼎記	列國志傳	七十二朝 人物演義
楚の平王	○	○	? 言及なし	? 言及なし	○ 楚の平公	○ 楚の平公	△ 楚の公子	○	△ 楚の靈王	△ 楚の靈王
秦の穆公	△ 秦の哀公	○	○	○	○	○	○	○	△ 秦の哀公	△ 秦の哀公
百里奚	△ 后子鍼	○	○	○	○	○	○	○	△ 子鍼= 姫輦	×
姫輦	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
卞莊	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
蒯聵	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
姫光	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
柳展雄	△ 盜跖	/	/	/	/	○	○	○	○	○
秋胡	×	/	/	/	/	○	○	○	○	○
姜鐸	×	/	/	/	/	×	×	○	○	○
來皮豹	×	/	/	/	/	○	○	○	×	×
華茂	×	/	/	/	/	○	○	○	×	×
晏嬰	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○
無祥公主	△ 秦の公女	○	×	○	×	○	○	? 後半を 缺くため	×	× 後の場 面で初 めて登 場

誘惑した人物として古くは劉向『列女傳』に見え、その逸話を題材とした元雜劇「魯大夫秋胡戲妻」があるため、元明の通俗文藝では有名なキャラクターであった。姜鐸は齊の公子としては史書に見えないが、『春秋左氏傳』昭公十四年の條に「冬十二月、蒲餘侯茲夫殺莒公子意恢。郊公奔齊。公子鐸逆庚與於齊」とある。伍子胥の楚から呉への亡命は昭公二十年の條に見えるので、この公子鐸は伍子胥と同時代の人物である。この人は實際には齊ではなく莒の公子なのだが、傍線部を「齊の公子鐸」と誤讀してしまい、齊の姓を冠した「齊の公子姜鐸」というキャラクターが誕生したのであろう。

残る姬輦・來皮豹・華茂の三人は、史書に見えないだけでなく、姜鐸のような來源も不明である。だが、姬輦は少し後の時代を描く脈望館鈔本元雜劇「鍾離春智勇定齊」にもかつて臨潼會に参加した秦の上將として登場する（伍子胥は登場しない）ので、臨潼會の登場人物として古くから定着していたと思しい。小松注(1)論文は、秦の君臣は時代が合わないが有名な穆公と百里奚が原型で、それが後に伍子胥と同時代の哀公と子鍼に改められ、その際に姬輦と子鍼を同一人物扱いする混乱が生じたと推定している。妥當な見解だろう。

## 二、『新刻彙正十八國開寶傳』の書誌情報

存一帙一冊。淡茶色表紙二四、九×一五、〇cm、左肩に「三告更」と墨書し、それを紅筆で打ち消して「全像十八國開寶傳」と改めている。墨筆の「三告更」は本書の別題だろうが、どんな意味でどの面に由来するのかは、通讀しても筆者には分からなかった。紅筆の題は後述の各葉の版心題と「開」以外は同じなので、「開」は版心の「開」を見誤ったのだろう。また、表紙の右側に「岩崎老兄惠存 神

山閨次」と墨書している。神山閨次（一八七〇～一九四三）は官僚出身で明治末期に群馬縣知事も務めた人物だが、古典籍の蒐集家としても知られ、『水滸傳』の版本問題に關する論文まで書いている。その神山からこのような本を贈られた「岩崎老兄」となると、まずは三菱財閥の二代目彌之助（一八五一～一九〇八）か三代目久彌（一八六五～一九五五）のどちらかではないかと想像されるが、當否は未詳。冊尾の原紙と補修紙の継ぎ目に補修の際に捺されたと思しき「有千閣」と讀めそうな綠色の小圓印が見えるが、他に藏書印は見當たらぬ。

巻中の第一葉から第六十葉までが残るが、第六十葉ではまだ巻中は終わっていない。巻首題「新刻彙正十八國開寶傳卷之中」、第二行から正文に入る（圖1）。每葉上圖下文、主に四周雙邊（左右雙邊や四周單邊の葉もある）、有界、十行十七字、内匡郭二〇、六（七、三十一、三二）×一、四cm。版心白口、單黑魚尾、魚尾上題「全像十八國開寶傳」、魚尾下題「中卷（隔約六格）丁付」。圖の左右に各行四字の圖題を配す。また、眉上中央に數字を記した出づ張り（金文京氏が「眉碼」と名付けて考察したもの<sup>6</sup>）が稀に設けられており、第五葉表に「五」、第十七葉表に「六」、第三十一葉表に「七」、第四十五葉表に「八」、第五十九葉表に「九」（圖2）とある。十二～十四葉おきに現れるこの數字が第五葉の「五」から始まっていることから、未發見の卷上は、序や目録と合わせて六十葉前後であったと推測される。してみれば、巻中最後の缺けている葉はそう多くないと思われ、後述する内容面のキリの良さも踏まえると、少なければあと一葉、多くてもせいぜいあと二、三葉で巻中は終わっていたと考えられる。

今回發見された冊には、撰者・編者・刊行者・刊年などに關する情報は何一つ記されていない。だが、「上圖下文で半葉十行十七字」と

圖1 『新刻彙正十八國開寶傳』卷中首

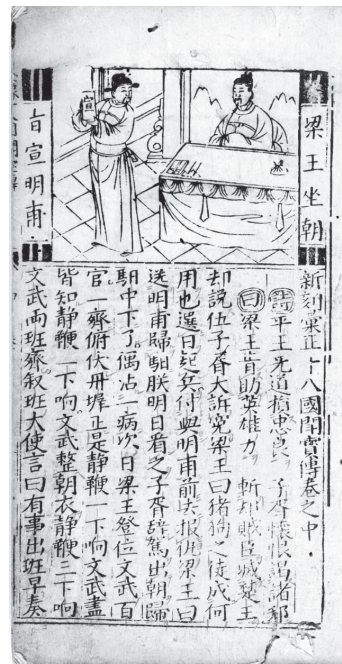


圖2 『新刻彙正十八國開寶傳』卷中第五十九葉表



圖3 『新刻全像廿四尊得道羅漢傳』卷一第



いう版式は萬曆中頃以降の明末の建陽での小説刊本に多用されているもので、例えば萬曆三十年（一六〇二）余象斗雙峰堂刊本『刊北方真武祖師玄天上帝出身志傳』四卷（英國博物院藏）、萬曆三十二年（一六〇四）楊氏清白堂刊本『新刻全像廿四尊得道羅漢傳』六卷（内閣文庫藏、圖3）、「萬曆間」文台余象斗刊本『新刊八仙出處東遊記』二卷（内閣文庫藏、二本）、「萬曆間」劉雙松安正堂刊本『鼎鏤全像按鑑唐鍾馗全傳』四卷（内閣文庫、靜岡縣立中央圖書館藏）、「明末」蓮台劉永茂（安正堂）刊本『鼎鏤全相唐三藏西遊傳』十卷（日光輪王寺、臺北故宮博物院藏）などがある。單に版式が一致するだけなら明刊本を清代に覆刻した可能性も考えられるところだが、圖の畫風や本文の字様は右記の明刊本各種と十分に似ており、清代の覆刻本にありがちな彫りの粗雑さは全く見られない。「眉碼」も金注(6)論文の説く通り明代後期の建陽刊本に特有のもので、この『新刻彙正十八國開寶傳』が萬曆中頃以降の明末に建陽で出版されたものであることはまず間違いないさそうだ。

### 三、『新刻彙正十八國聞寶傳』の内容

卷中は伍子胥が楚の平王に父と兄を殺され、楚の太子米建・その母の蔡后・妻の馬妃・幼子の百工の四人を連れて梁に來て、楚を討つための兵を梁王に借りようとする場面から始まる。つまり、『十八國聞寶傳』という書名でありながら、十八諸侯の鬪寶の會の場面は巻上で早々に終わっているのだ。とはいえ、伍子胥は作中の人物から「伍明甫」と尊稱されているし、衛の公子蒯外が臨潼會で伍子胥に恨みがあると言ったり、宋の元公や鄭の聲公や陳の共公や吳の公子姬光らが臨潼會で伍子胥に恩を受けたと言ったりしているの、巻上に臨潼會の鬪寶の會の場面があつて、そこで伍子胥が蒯外らと争つて明甫（本書では一貫してこの表記）の座を勝ち取り、見事に會を取り仕切つて諸侯を無事に歸國させていたのは確實である。

巻中のごく大まかな話の筋は次の通りである。なお、番號は筆者が便宜上付けたもので、原本にあるものではない。

- ① 梁で芦医の治療を受け、衛の公子蒯外と戦う（〜第六葉裏）
- ② 梁を去つて孔子に出會い、柳展雄と再會する（〜第十二葉表）
- ③ 孔子と魯に仕え、夾谷の會で齊將朱儒を斬る（〜第十七葉表）
- ④ 宋に仕えて鄭と和し、華氏の亂を収める（〜第二十三葉裏）
- ⑤ 鄭で晉の反奸計にかかり、米建が殺される（〜第二十八葉裏）
- ⑥ 秋胡戲妻の話（〜第三十葉裏）
- ⑦ 陳に滞在して夏徵舒の亂を収める（〜第三十八葉表）
- ⑧ 伏龍寺に百工（米勝と改名）を預ける（〜第三十九葉裏）
- ⑨ 吳に行くために昭關を突破する（〜第四十一葉表）
- ⑩ 浣紗女投江の話（〜第四十二葉裏）

明刊本小説『新刻彙正十八國聞寶傳』の發見とその意義

- ⑪ 漁翁辭劍の話（〜第四十四葉裏）
- ⑫ 三人の豪傑とそれぞれ義を結ぶ（〜第四十八葉裏）
- ⑬ 市中で簫を吹き、吳王僚に登用を拒まれる（〜第五十一葉表）
- ⑭ 孫武子・姚鬪と共に姬光の腹心となる（〜第五十四葉表）
- ⑮ 專珠を仲間に入れる（〜第五十七葉裏）
- ⑯ 干將に魚腸劍を借りる（〜第五十九葉裏）
- ⑰ 吳王僚暗殺と吳王闔閭の即位（第六十葉裏では未完）
- ⑱ ④に華元、⑦に陳の靈公・夏氏・夏徵舒など、明らかに時代の合わない實在の人物が散見される。そればかりか、宋の忠臣として知られる華元が④で謀反を起こしたり、史實では篡奪をする側の夏徵舒が⑦で逆に叔父に父を殺される篡奪の被害者になっていた、時代は概ね合つていても衛の靈公の夫人であつた南子が①で衛から梁に献上されていたり、甚だしくは越王句踐から吳王夫差に贈られた美女西施の別名であるはずの西子が③で齊から魯に献上されていたりと、史實と全く異なる役回りをする人物が少なくない。とはいえ、④⑤⑨⑪⑬⑭⑯⑰は、いずれも大幅な脚色を受けてはいるが、『史記』「伍子胥列傳」に一應の片鱗が認められる話ではある。明代までの伍子胥を主人公とする通俗文藝作品でも、話の筋は異なれど、對應する場面が見出せることが多い。また、⑩は『史記』までの諸資料には見えないが、漢代の『越絶書』や『吳越春秋』から見え、明代までの伍子胥を主人公とする通俗文藝作品でも定番の場面である。一方、②③⑥⑦は本來は伍子胥と全く関わりのない史實や故事に伍子胥の活躍をねじこんだ話で、「はじめに」で擧げた明代までの他の通俗文藝作品のいずれにも見えない。但し、⑥⑦に登場する秋胡は、前述の通り臨潼鬪寶の場面ではお馴染みのキャラクターであつた。①⑧⑫は完全に架空の話で、

明代までの他の通俗文藝作品には見えないものである。

卷中第六十葉裏は、公子姬光の意を受けた刺客の專珠（『史記』では專譚）が吳王僚を刺殺し、專珠もまた吳王の部下に殺されてしまうものの、伍子胥が武力でその場を制壓して何かを言おうとするところで終わっている。この直後は姬光が吳王闔閭として即位する場面に違はなく、あと一、二葉もあれば十分そこまで描き切れそうなので、前述した「眉碼」から卷上が六十葉程度だと推測されることも併せて考えると、卷中は吳王闔閭の即位で終わっていた可能性が極めて高い。

未發見の卷下では、伍子胥が孫武子と共に吳の兵を率いて楚の都を陥落させ、平王の屍を鞭打って復讐を果たす話が描かれていたことは間違いない。『史記』や『吳越春秋』や『伍子胥變文』ではその後には吳越の戦いの話が續くが、それを伍子胥の死や吳の滅亡まで描き切るには、卷下だけでは紙幅が足りそうにない。それに、まさか西子と西施は別人だと言ひ張る譯にもいくまいから、吳越の戦いを描こうとすれば、卷中で魯の定公の後宮に入ってしまった西子の扱いに困るはずである。となれば、卷下は伍子胥が楚への復讐を果たして吳に凱旋する邊りで終わっていたのではなからうか。<sup>①</sup>

それはともあれ、卷中は楚を出奔した伍子胥が諸國を遍歴し、最後に辿り着いた吳で公子姬光の腹心となって彼を王位に就けるところまでを描いている。この範圍を通して描く他の明代までの資料だと、まず『史記』では宋・鄭・晉を経て、再度鄭を訪れてから吳に向かう。『吳越春秋』では楚から直接吳に行く。「伍子胥變文」では父と同じ楚ではなく梁に仕えていたが、梁から直接吳に向かう。「伍員吹簫」雜劇では鄭を経て吳へ行く。『列國志傳』では宋・鄭・陳を経て吳に向かう。對してこの『十八國鬪寶傳』では、伍子胥は梁・魯・宋・鄭・

陳を歴訪した上でようやく吳に向かつており、他のどれよりも多くの國を訪れている。特に、魯に立ち寄るのは『十八國鬪寶傳』のみだし、時代の合わない國である梁も他に「伍子胥變文」にしか出て来ない。ところが、清代の車王府曲本『左傳春秋』鼓詞には、話の細部は時に異なれど、梁で扁鵲（盧醫（音医）の別名）の治療を受けたり、孔子と共に魯に仕えて夾谷の會で齊將朱儒を斬つたりという、『十八國鬪寶傳』と同じ展開が多々見られる。となると、『左傳春秋』鼓詞は『十八國鬪寶傳』と同系統の物語が更なる改編を受けて成立した可能性が高い。『左傳春秋』鼓詞が吳越の戦いが本格化する手前で終わる（吳越の戦いは『六部春秋』鼓詞の第二部『吳越春秋』鼓詞の前半で描かれる）點も、『十八國鬪寶傳』の卷下は吳越の戦いまでは描かずに終わっていた可能性が高いという先の推定と符合する。

もう一つ着目すべきは⑩浣紗女投江と⑪漁翁辭劍の順序で、⑩の初出である『越絶書』や『吳越春秋』では、⑪が先で⑩が續いていた。しかし、『伍子胥變文』では⑩が先で、伍子胥の姉の家と妻の家という二場面を挟んでから⑪となる。「伍員吹簫」雜劇と『十八國鬪寶傳』では⑩の直後に⑪、『列國志傳』は逆に⑪の直後に⑩がある。「伍員吹簫」雜劇・『十八國鬪寶傳』・『列國志傳』の三者は史書や「伍子胥變文」では姓名が見えない漁翁に閭丘亮という同じ姓名を設定しているのので、『列國志傳』だけが全くの別系統に屬する話だという譯でもない。どうやら、通俗文藝の世界では史書とは逆の⑩⑪という順序が唐代から明代まで引き繼がれていて、『列國志傳』もその流れを汲む通俗文藝の設定に従って兩場面を描きつつも、順序は史書を参照して⑪が先の形に改めた、ということのようである。



#### 四、小松説の検証

小松注(1)論文は、『列國志傳』の臨潼鬪寶の場面の元になった通俗文藝作品について次のように推測していた(三三頁)。

臨潼鬪寶の物語は、『列國志傳』の中でも特に史實と異なる内容を持っていた。そして馮夢龍が、やはり史實と一致しない部分を多く含む『全相平話』と重なる部分については一言もふれず、ここだけを問題にしているのは、兩者における史實逸脱の水準が異なることを示すものであろう。即ち、『全相平話』と重なる部分が、あくまで現實に存在した歴史的事件をもとにして、それを大幅にふくらませているのに對し、臨潼鬪寶は現實にはありえない事件を、いわば捏造したものである。知識水準が高い人間ほど、史實への密着を要求することはいうまでもない。しかも秦の穆公・百里奚・盜跖から、「秋胡戲妻」の説話で有名な秋胡、虎殺して知られる下莊に至るまで、時代に關わりなく春秋時代の有名な人を登場させているあたり、前後の物語との接續や史實との關係をほとんど意に介した形跡がない。つまり臨潼鬪寶の物語は、『全相平話』所收の物語よりも大衆的な性格を持つのではなからうか。

臨潼鬪寶の内容を含む、伍子胥を主人公とした『全相平話』が存在した可能性も決して否定はできないが、これに續く吳越の戦いの部分の内容は、基本的には『史記』・『左傳』・『吳越春秋』の域を大きく外れることがなく、臨潼鬪寶とともに一つの小説を形成することはいかにも不自然に感じられる。おそらくは、「按鑑」の原則通りの史書に基づく記述の中に、『全相平話』とは異なる

起源を持つ、より通俗的な臨潼鬪寶の物語がはめこまれた可能性が高いとみるべきであろう。

前掲の表1に挙げた登場人物のうち、『列國志傳』ではここが初登場の蒯瞶・下莊・柳展雄・姜鐸は以降の場面には登場しないし、この後も登場する哀公・晏嬰・秋胡も伍子胥と再び關わりはしない。伍子胥と再び絡むのは姬光と姬輦(=子鍼)だけなので、確かに『列國志傳』の臨潼鬪寶の場面は前後から浮いてしまっている。だが、『十八國鬪寶傳』巻中では、①に蒯外、②に柳展雄、③に姜鐸、④⑤に下莊、⑥⑦に秋胡、⑧⑨⑩に姬光と、伍子胥の行く先々で表1に見える人物が殆ど絶え間なく現れている。つまり、『十八國鬪寶傳』の巻中は、小松氏がその存在をどちらかと言うと否定的に考えていた、臨潼鬪寶の物語から直接繋がる伍子胥の諸國遍歴の物語なのである。

そもそも、臨潼鬪寶の物語を描くどの作品にも必ず見える伍子胥が吳の公子姬光に繰り返し恩を賣る點や、一部の作品に秦の無祥公主が登場して楚の太子建と婚約する點は、『史記』「伍子胥列傳」の描く傳統的な形の伍子胥の楚への復讐譚に繋がる伏線として機能するように作り込まれた要素と見るべきではなからうか。姬光はもちろん後の吳王闔閭だし、『史記』や『吳越春秋』で伍子胥の父伍奢が平王に殺されたのは、伍奢が傳役を務める太子建に嫁ぐはずだった秦の公女を平王が自分の妻にしてしまったことに起因するからである。つまり、臨潼鬪寶の物語は、そもそもが伍子胥の楚への復讐を描く長い物語の序章として構想された、後の場面への伏線を幾つも含むものだったと筆者は考える。特に重要なのが無祥公主の婚約で、この要素があれば、臨潼鬪寶の物語は小松氏が説くように史實に何一つ根差さない完全な捏造という譯ではなく、「秦の公女が楚の太子建と婚約した」という

歴史的事實に基づきながら、史書には見えない婚約のきつかけを演出過剰に創作したものだと言えるはずである。

そのように考える場合、無祥公主が登場しない作品の存在が當然問題となるが、無祥公主はこの場面に觸れる現存の諸作品の中で飛びぬけて年代の古い元刊本「楚昭王」雜劇の時點で既に登場しているので、臨潼鬪寶の物語が作られた當初から存在していたキャラクターだと想定することに大きな無理はないだろう。脈望館本「楚昭王」雜劇や元曲選本「伍員吹簫」雜劇には無祥公主が登場しないが、いずれも臨潼會を直接描く譯ではなく、登場人物の口から前日譚として部分的に語っているに過ぎない。よつて、たまたま公主について明記していないだけで、彼女が登場する話を念頭に置いていた可能性はある。少なくとも、元刊本と元曲選本の両方に無祥公主が登場する「楚昭王」雜劇については積極的にそう考えるべきだろう。

『列國志傳』では、臨潼會の終了から無祥公主が楚に嫁ぐ話が始まるまでの間に伍子胥とは無關係の史實や故事が四則に渡つて描かれ、その中で楚の君主が靈王から平王に代替わりしている。それゆえ平王が臨潼會に赴く作品と違つて臨潼會で無祥公主を楚の太子建と婚約させることは不可能であり、敢えて彼女が臨潼會には登場しない形にしたのだろう。前節で見た通り、『列國志傳』は先行する通俗文藝作品に據つて⑪漁翁辭劍の場面を描きながらも、史書に合わせて⑩浣紗女投江との順序を入れ替えていた。となると、『列國志傳』は小松説のように臨潼鬪寶の場面だけを扱う短い物語をほぼ無加工に取り込んだのではなく、伍子胥を主人公とする臨潼鬪寶に始まる長い物語から場面を適宜取捨選擇して、必要に応じて加工しながら取り込んでいたのではあるまいか。その結果、『史記』『春秋左氏傳』『吳越春秋』な

どの史書に據るだけでも書ける場面には基づいた物語の影が極めて薄くなる一方、参照可能な史書の存在しない臨潼鬪寶の場面にだけ基づいた物語が持つていた荒唐無稽な要素が色濃く残つたのだと考えられる。『新列國志』のように臨潼鬪寶の場面を丸ごと削除してしまうことも出来たはずだが、最重要モチーフのはずの無祥公主の婚約を割愛してまでこれを残したのは、それだけ人氣の場面だったからであろう。なお、姜鐸が登場する以上、『列國志傳』が利用した伍子胥を主人公とする物語は、雜劇諸作品よりも『十八國鬪寶傳』や『七十二朝人物演義』に近い内容であつたはずだ。

そうなると、『列國志傳』の他の史實から掛け離れた場面が三つとも「全相平話」シリーズに由来すると判明している以上、臨潼鬪寶の場面でも伍子胥を主人公とする失われた「全相平話」由来の物語を参照していた可能性について改めて検討する必要がある。より踏み込んで言えば、『新刻兼正十八國鬪寶傳』自體が伍子胥を主人公とする「全相平話」の内容を受け継いだ小説刊本であり、これと同系統の小説(或いはこの小説自體のより早い刊本)が『列國志傳』の参照元であつた、という可能性はないのであろうか。現存しない「全相平話」の内容や文章がある程度引き継いでいる可能性が高い明代の小説として『全漢志傳』『兩漢開國中興傳誌』『孫龐鬪志演義』などが知られているから、あながち無理な想定でもないはずだ。

そもそも、臨潼鬪寶の物語は、本當に小松氏が言うように「全相平話」各種よりも大衆的な性格を持つていたのだろうか。例えば、『樂毅圖齊七國春秋後集』の元になった史實は、「樂毅が諸國の連合軍を率いて齊を追い詰めたが、齊も反撃して命脈を繋いだ」である。本來そこには全く関わりのない孫臏を現存しない『七國春秋前集』から引

き續き登場させて樂毅と戦う長い物語に仕立て、兩者の師による仙術合戦まで導入してしまう大膽さは、「秦の公主が楚の太子建と婚約した」という史實を導くための事件として大仰な臨潼鬪寶の場面を創作してしまふ場合のそれと、さしたる差があるように筆者には思われない。『列國志傳』は流石に仙術合戦までは取り入れていないが、孫臏は樂毅圖齊の話の前半部にも登場する。對して、馮夢龍が改編した『新列國志』では孫臏は『史記』と同じ範圍にしか登場せず、樂毅とは全く關わらなくなっている。『新列國志』が削除した場面のうち臨潼鬪寶だけに序文で言及しているのは確かだが、例を擧げるに當つて特に人氣が高い場面を選んだという解釋も可能だろうし、實際に荒唐無稽さの程度による言及だったとしても、問題の所在は各場面が基づいた物語自體の性質ではなく、それらの荒唐無稽さを『列國志傳』が各場面にどれだけ残していたかにあるはずだ。扱ふ時代が異なり『列國志傳』には取り込まれていない『三國志平話』を見ても、曹操・孫權・劉備が韓信・英布・彭越の轉生だとか、十八諸侯が虎牢關に集結して董卓軍と戦うとか、張飛が袁術の息子を撲殺するとかいった史實から掛け離れた荒唐無稽な場面は大量にある。従つて、伍子胥が主人公の「全相平話」があつたか否かを検討する上で、臨潼鬪寶の物語や『新刻彙正十八國聞寶傳』巻中の荒唐無稽さをことさらに問題にする必要はないように感じる。

## 五、『新刻彙正十八國聞寶傳』の體裁と

### 「全相平話」

明清の長篇白話小説では、①全體を複数の章に分ち、②各章に一句か二句の章題を附して、③各章を「第××回」と表記する、いわゆる

る分回本の形が最も良く見られる體裁である。①②だけを充たす版本も比較的早い時期を中心に間々見られ、その場合は分則本と呼ぶのが慣例である。一方、分回本でも分則本でもない、つまり章分けをしない長篇作品の事例は、明代の刊本では韻文が主體の成化說唱詞話『花關索傳』前後續別集（上海博物館藏）が僅かに該當する程度で、章分けをしない散文主體の長篇白話小説の刊本は、まだ文體や表記の體系が未成熟な元代の「全相平話五種」や『新編五代史平話』（臺灣國家圖書館藏）まで遡らなければ從來は知られていなかった。

ところが、『新刻彙正十八國聞寶傳』は、間違いなく散文主體の長篇白話小説であり、前述の通り明代後期の刊行と見られるにも關わらず、分回本でも分則本でもない。これは極めて異例である。但し、全章を分けていないとも言ひ切れず、「却説」という語が出て來ることに高確率で改行して段落を改めており、そこがちょうど話の切れ目に當たつてることが多い。具體的には、現存の範圍に六十八例ある「却説」のうち、五十八例が行頭に置かれてゐる。毎葉一回の頻度で段落を改めてゐる計算であり、一應この改行が分則の代わりになっているようだ。とはいえ、分回本の回目や分則本の則目のような本文内に記される章題は、本書には一切存在していない。

この「却説」という語は、「全相平話五種」のうち三種でも多用されている。半葉二十字二十行で全四十二葉の『武王伐紂書』に十九例、半葉十九字十九行で全四十二葉の『樂毅圖齊七國春秋後集』に四十四例、前者と同行款で全六十九葉の『三國志平話』に四十四例という具合で、いずれも改行こそされていないものの、多くは話の切れ目になっている。よつて、『新刻彙正十八國聞寶傳』における「却説」の用法は、「全相平話」シリーズの一部の流れを汲むものと看做せよう。

「却説」の用法だけではなく、史書に見える人名に當て字や誤字が頻出する點（刪贖↓刪外、陳亢↓陳剛、專諸↓專珠、要離↓姚離、椒丘訴↓焦休咎など）や、文章がしばしば舌足らずで讀みづらい點でも、『新刻彙正十八國開寶傳』は「全相平話五種」を彷彿とさせる。

物語の構成もまるで洗練されておらず、ほんの二萬字程度の巻の中で複数の似たような話が繰り返されている。虎退治が二回、戦に敗れた國が敵國の君主に美女を献上して骨抜きにする「脂粉計」を用いるのが三回、君主が美女に骨抜きにされる話は他にも一回、王侯の暗殺が二回と公子の暗殺が一回、賢女の自殺が三回と悪女の自殺が一回、という具合で、特に「脂粉計」のワンパターンさ加減は救いようがない。登場人物の臺詞も畫一的で、例えば伍子胥は行く先々で計十二回も「吾乃亡楚伍員也」と名乗り、色々な相手からこれまた計十二回も「(久)聞(楚)平王無道、是否？」と聞かれている。

總じて、この『十八國開寶傳』なる小説は、『水滸傳』や『西遊記』のような洗練された白話文を使いこなして壮大な世界觀を描き切る傑作はおろか、『三國演義』の二匹目の泥鰌を狙って嘉靖半ばから明末にかけて數多く編まれた文言寄りの文體の（一般に文學的な評價は芳しくない）講史小説の多くと比べても、小説としての完成度はかなり見劣りすると言わざるを得ない。しかし、それは同時に、この小説が「全相平話五種」のような搖籃期の白話小説刊本に近い特徴を備えているということでもある。特に、分回本でも分則本でもない代わりに「却説」で改行するという極めて珍しい特徴は、この小説刊本が伍子胥を主人公とする失われた「全相平話」を色濃く引き継いだものであることを示唆しているのではないだろうか。

## 六、日用類書『五寶故事』の引く伍子胥の物語

建陽出身で金陵で書肆を營んだ葉貴（號近山）が、萬曆十二年（一五八四）に金陵で『孔聖全書』三十五卷（山東省圖書館、内閣文庫等藏）を刊行している。同書は孔子の逸話を經史子集の諸書から廣く引用したものが、卷三十五で陳器『五寶故事』なる書物から九條を引いている。そのうち四條の内容が『新刻彙正十八國開寶傳』巻中で孔子が登場する②と③の段に一致しており、時系列順にはなっていない各條を並べ替えると、②③の兩段の内容を完全に網羅する。その確認のため、まず『新刻彙正十八國開寶傳』の②③のあらすじを示す。

②伍子胥は米建ら四人を連れて魯へと向かう途中の泉で、子路が虎の尾を引きちぎって追い拂うのに出くわす。子路の紹介で孔子と初めて對面し、孔子から魯に仕える弟子の仲弓を紹介される。仲弓の推舉で魯の兵を借りて楚を攻めようとするが、少正卯に反對されて登用されなかつたため、子胥は諦めて米建ら四人と宋に向かう。仲弓は子胥を引き留めようと陳剛（『論語』などでは陳亢）を連れて追い掛けるが、途中で盜賊に捕まり、食べられそうになる。逃げ延びた陳剛からそれを聞いた孔子が盜賊を説得に行くが、盜賊は屁理屈で反論し、孔子まで捕まえて食べようとする。二人を救出に來た子路が盜賊と戦っているところへ、様子を見にいったん一人で魯に戻る途中だった子胥が通りがかる。盜賊の正體は盜跖こと柳展雄であり、子胥とは舊友だったため、戦いは中止となり、孔子は無事に解放される。子胥は展雄と別れ、孔子に連れられて魯に戻り、共に魯の定公に仕えることになる。

③齊の景公の弟の公子姜鐸が魯に戦いを挑んで來るが、伍子胥に撃

退される。景公は田乞の計を採用し、魯の定公を夾谷での宴に招待した上で、大男の將軍朱儒に宴席で劍舞にかこつけて定公を斬らせようとする。伍子胥は劍舞の相手を申し出て逆に朱儒を斬り、歸路に現れた齊の伏兵を蹴散らして定公と孔子を守り、孔子の言いついで三千弟子を率いて伏兵していた子路が姜鐸を討ち取って、一行は無事に歸國する。齊は「脂粉之計」で樂女の西子を魯に送り込み、彼女を寵愛した定公は政治を顧みなくなってしまう。孔子と子胥は辭職し、子胥は米建ら四人と今度こそ宋に向かう。續いて、『孔聖全書』が『五寶故事』から引く四條の全文は、記されている順に以下の通りである（紙幅の都合で譯文は割愛）。

①五員因楚平王殺其父兄、投各國求仕、借兵復讎。魯定公立爲司馬。齊人歸女樂於魯、定公受之、不聽伍員・孔子之諫、遂納爲妃。定公自是不復聽政殿上、數日一升。員奏曰：「本國兵少、不堪伐楚。今拜辭、前往他國。望君勿罪」。孔子亦奏乞恩放歸田里。定公恐二人朝不免再諫、乃並許之。二人歸至仲弓之舍、仲弓備酒贈之、以路費、遂至十里長亭。伍員遂投入宋國。

↓③の段の末尾と全く同じ展開。③の段では伍子胥の暇乞いの臺詞は「本國兵微將少、不堪伐楚。臣請別邦再借兵去、望主勿罪」なので、明らかに同系統だと認められよう。

②孔子出遊周流天下時、夏景立道傍垂楊下歇息。口渴、令仲由往河邊取水飲之。由至遇一虎吨水、喝聲：「業畜！」一手撩衣向前而擊。其虎急走、將虎尾扯其半截。虎奔而去。伍員逃難自梁投魯、在塗見之、駐馬問曰：「打虎君子是誰？」答曰：「姓仲、名由、字子路是也。因師渴取水、見虎先飲。故怒而責之」。邂逅相識、接見孔子。子告之曰：「吾門弟冉仲弓仕魯。可以主之」。後孔子與員

同仕魯。他日孔子言「暴虎馮河、吾不與」者、蓋據此而言也。

↓②の段の冒頭と全く同じ展開。②の段で子路が虎を打つ際にも「忽有一人、儒冠布衣、前來喝聲：「業畜死礼！」將衣一手撩起、向前便打其虎」ということ酷似した文章がある。

③孔子・伍員仕魯。齊公子姜鐸兵至其國、求進奉（割注：求寶物進貢）。鐸與員戰、不勝而還。齊人患其將霸、欲敗其政。上大夫田乞奏曰：「魯用此二人者、若不早除之、本國亡矣。今有夾谷春景可愛、設一酒筵□□請魯公領文武二臣起會、命矮將侏儒、筵中舞劍奉飲、將魯公誅之、擒孔子・伍員而國定矣」。及請果至、景公暗喜中計、奏宮中之樂、以酒上壽。侏儒請舞劍、孔子趨而進曰：「匹夫榮侮諸侯者、罪應誅。請左司馬伍員、速加刑焉」。伍員曰：「臣請對舞」。景公不語。於是伍員斬侏儒、請魯定公行。田乞子田恒伏兵暗勦、伍員以銅鞭擊傷、始退。姜鐸兵復至、遇子路集朋衆接師、一戰劉死姜鐸、齊兵敗轉。景公歸責田乞與衆臣曰：「子以夷狄之道、教寡人用計不中、又傷朕弟。假若魯以伍員領兵伐齊、如之奈何？」乞曰：「臣有一計、名曰脂粉、可使不來。國內選有美女文馬、以遺魯君」。季桓子勸受女樂、魯君三日不聽國政、郊又不致膳。孔子・伍員遂行。

↓③の段全體と全く同じ展開。前述の通り『春秋左氏傳』の誤讀によつて生じたと考えられる架空の人物の姜鐸が全く同じ形で登場するほか、③の段の田乞や定公の臺詞もこれと良く似ている。侏儒（朱儒）を斬る前後の描寫はこちらの方が③の段より詳密だが、③の段と違って子路の軍が豫め配置された伏兵だと語らないなど、こちらの方が簡略な箇所もある。

④伍子胥投魯、冉仲弓力薦。少正卯沮之、定公不用。退而私奔。仲

弓追至林間、遇柳盜蹻。展雄捉入、去衣綁樹、以凉水拍胸傳換熱氣、欲取心肝爲食。陳亢在後、走脫見孔子白於。孔子入塞、以善言誘之。展雄怒曰：「爾雖有仁義禮智信五常之德、吾亦有之。却富不規貧、謂之仁。聚衆不聚散、謂之義。排陣能有序、謂之禮。打家必有法、謂之智。一約齊至、謂之信。何必多言？」喚仲人、亦將縛之如仲弓然。孔子嘆曰：「虎豹不可以相食」。忽聞子路持戟救師、赴敵數合。未分勝負、幸子胥回探定公事實、聞故入山、認有舊好得釋。（割注：員年十九、雄年十八。雄與員數戰不勝、結爲兄弟、故有舊好。）

↓②の段のうち①より後の話と全く同じ展開。孔子をやりこめる展雄の屁理屈は②の段では「我亦有仁義礼智信。却財不規窮、謂之仁。聚衆不聚散、謂之義。令行令不阻、謂之礼。持家必有法、謂之知。約會盡取齊、謂之信」というもので、禮以外の四つは字句こそ若干違えど同内容である。

陳器『五寶故事』なる書物から『孔聖全書』に引かれている伍子胥の登場する話が、『新刻彙正十八國聞寶傳』と極めて近い関係にあることが了解されよう。文章の細部まで酷似する箇所が臺詞を中心に少なからずある反面、どちらか一方だけの描寫が詳しい箇所もあるので、両者は片方がもう片方を引用した親子関係ではなく、同系統のテキストトから分岐した親戚関係にあると考えた方が良さそうだ。

『五寶故事』なる書物は管見の限り現存が確認出来ず、陳器についても未詳だが、『孔聖全書』と同じ葉貴が萬曆二十五年（一五九七）に金陵で刊行した『群書考索古今事文玉屑』二十四卷（内閣文庫等藏）の參考書目「群書考索古今事文玉屑採用諸書目錄」に「書言故事 綱目故事 五寶故事 七寶故事 金壁故事」という並びが見えるので、

『五寶故事』というのは多数の明刊本が傳わる『書言故事』や萬曆三十二年（一六〇四）黃次白集義堂重刊本『新刻聯對便蒙圖像七寶故事大全』二十卷（東京大學東洋文化研究所藏）が残る『七寶故事』のような、有名な故事を手短にまとめて集めたタイプの日用類書だったと見てまず間違いないまい。つまり、まず日用類書『五寶故事』が伍子胥と孔子の交流を描いた通俗小説の一段を長めに要約し、それが更に孔子の逸話を集めた『孔聖全書』に引用されたものと思われる。

『孔聖全書』は萬曆十二年刊本なので、版式や字様や畫風から萬曆中頃以降の刊行と推定される『新刻彙正十八國聞寶傳』よりも、ほぼ確實に先に刊行されている。してみれば、その『孔聖全書』に更に先立つ『五寶故事』が要約して引いた小説は、『新刻彙正十八國聞寶傳』よりも刊行の早い版本で、系統的にかなり近い関係にはあるが、全くの同文ではなかったものと推定される。それが失われた「全相平話」の系譜を引く版本だったとしたら、その時期までに日用類書に引用されるほど浸透していたとしてもさして不思議ではあるまい。

## 七、女眞文字譯『十八國鬪寶傳』と「全相平話」

正統六年（一四四二）成書の楊士奇等編『文淵閣書目』は、明朝が元の大都で接収した宋・金・元以來の宮廷藏書を永樂年間に南京から北京に移したのをきっかけに編まれた、明の宮廷藏書の目錄である。その卷四「來字號第一厨書目・古今志・雜志附」の末尾に、女眞文字<sup>18)</sup>（女直字）で書かれた本が次の通り十八冊まとまって著録されている。

女直字盤古書一冊 女直字孔夫子書一冊 女直字孔夫子遊國章一冊  
 女直字家語一冊 女直字家語賢能言語傳一冊 女直字姜太公書一冊  
 女直字姜太公書一冊 女直字姜太公書一冊 女直字伍子胥書一冊 女直字十八

國鬪寶傳一冊 女直字孫贖書一冊 女直字善御書一冊 女直字海  
錢公書一冊 伍子胥書一冊 女直字黃氏女書一冊 女直字黃氏女  
書一冊 女直字百家姓一冊 女直字哈答咩兒千一冊 女直字母一  
冊

先行研究ではこれらは子供向け教材として翻譯されたものと推測される程度で、管見の限り通俗文藝との關係が指摘されたことはなさうである。だが、『女直字十八國鬪寶傳』は書名からして臨潼鬪寶の物語を女眞文字に翻譯したものとしか考えようがないだろう。十八諸侯の鬪寶會が史書には見えない架空の話である以上、翻譯元の漢語資料は何らかの通俗文藝作品と見るより他にない。また、同名の二點が竝ぶ『女直字黃氏女書』も、『新刻金瓶梅詞話』（臺北故宮博物院、日光輪王寺等藏）第七十四回「宋御史索求八仙鼎 吳月娘聽宣黃氏卷」が引く講唱文藝『黃氏女卷』の物語の翻譯らしく見える書名だ。

こうなると、一見すると兵法書か史書の翻譯かと思える書名の『女直字姜太公書』二點と『女直字孫贖書』も、それぞれ「全相平話」シリーズの『武王伐紂書』や『七國春秋』前後集との關連を疑いたくなく、踏み込んで言えば、連續して著録されている『女直字姜太公書』二點、『女直字伍子胥書』、『女直字十八國鬪寶傳』、『女直字孫贖書』の計五冊は、いずれも「全相平話」シリーズそのもの、乃至はその直系に連なる小説刊本の翻譯だったのではないだろうか。女眞文字は十五世紀の初めまでは東北地方に住む女眞人に實用されていたらしいので、十四世紀前半に刊行された「全相平話」シリーズやその直系に連なる小説刊本が正統六年までに女眞文字に翻譯されるというのは、決して全くあり得ない話ではないだろう。<sup>20</sup>

右の假説を採る場合、『女直字伍子胥書』というのは、『左傳春秋』

鼓詞に對する『吳越春秋』鼓詞のような、吳越の戦いを描いた『女直字十八國鬪寶傳』の續編だったと考えるのが妥當だろう。「全相平話」シリーズのうち『七國春秋』は現存する後集と失われた前集とで卷首題の「七國春秋」より前の部分が違ったことが確實だし、成化說唱詞話『花關索傳』前後續別集も各集が内容を反映した別々の卷首題になっているから、女眞文字本の底本となった小説刊本も同じように楚への復讐譚と吳越の戦いとで卷首題が變わっていて、それが女眞文字本の漢語書名にも反映されているのではないだろうか。<sup>21</sup>

## 小 結

以上、本稿では新出資料『新刻彙正十八國鬪寶傳』の概要を紹介しながら、同書の内容が小松注(1)論文で想定されていた『列國志傳』の臨潼鬪寶の場面の原型となつた物語と同系統であることや、車王府曲本長篇鼓詞『六部春秋』の第一部に當たる『左傳春秋』鼓詞の内容もこの系統に連なっていることを示し、更にはこの『新刻彙正十八國鬪寶傳』が失われた伍子胥を主人公とする「全相平話」の話の筋や文章を受け継いだものである可能性があることを指摘した。

同書が「全相平話」を受け継ぐ可能性の根據としては、『列國志傳』の史實と掛け離れた場面のうち臨潼鬪寶以外の三か所の参照元はいずれも「全相平話」の系譜を引く小説だと推定されていること(第四節)、分回本でも分則本でもなく「却說」という語で話の切れ目を示す形式が「全相平話五種」のうち三種と一致すること(第五節)、『新刻彙正十八國鬪寶傳』と非常に近いが異なる文章を持つ小説が萬曆十二年刊本に先立つ日用類書に要約引用されていること(第六節)、正統六年までに「全相平話」そのもの乃至その系譜を引く小説が複数

女眞文字譯されていた可能性があること(第七節)などを挙げた。

これらはいずれも單獨では確實な證據とは言い難いものではあるが、これだけ様々な角度から存在が推定されるとなれば、『新刻彙正十八國聞寶傳』がそれをどこまで踏襲しているかはさておくとしても、伍子胥を主人公とする「全相平話」が存在していたこと自體の蓋然性は、非常に高いと認めても良いのではなからうか。してみれば、『新刻彙正十八國聞寶傳』の發見は、單に未知の明代の白話小説刊本の存在が確認されたというだけに留まらず、元代の「全相平話」から明清の小説刊本、更には清代の鼓詞にまでも連なる通俗文藝の發展史を考える上でも重要な意味を持つことになるかもしれない。

注

- (1) 小松謙『列國志傳』の成立と展開——『全相平話』と歴史書の結合體(『中國歴史小説研究』、汲古書院、二〇〇二) 参照。
- (2) 建陽系の八卷本と蘇州系の十二卷本という二系統があり、話の筋に大きな違いはないが、細部の字句には異同がある。原刊本は建陽で出た八卷本だったが、現存諸本の中では蘇州系に屬する萬曆四十三年(二六一五)朱篁序刊本『新鐫陳眉公先生批評春秋列國志傳』十二卷(臺北故宮博物院藏)が古い本文を最も良く留めていると大塚秀高「講史小説の出版と改變——『列國志』をめぐる」(『中國古典小説研究動態』三號、一九八九)が考察し、小松注(1)論文もその説に賛同している。本稿では断りのない限り『列國志傳』は朱篁序刊本に據る。
- (3) 田村彩子「伍子胥舉鼎の物語」(『和漢語文研究』第十五號、二〇一七)で諸作品のより詳細な比較が行われている。
- (4) 但し、『七十二朝人物演義』のみ百里奚に相當する秦の謀臣がない。

- (5) 但し、盜跖の姓名が柳展雄、楚の太子建と婚約する秦の公女の名が無祥公主というのはいずれも通俗文藝での設定で、『史記』には見えない。
- (6) 金文京「明代建陽の商業出版と通俗小説」(藤本幸夫編『書物・印刷・本屋——日中韓をめぐる本の文化史』、勉誠出版、二〇二二)参照。金氏はこれが明代後期の建陽刊本に特有のものだと指摘し、先行研究では太田辰夫氏以外の言及が見当たらないとした上で考察しているが、拙稿「唐氏世徳堂と周日校萬卷樓仁壽堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」(『中國古典小説研究』第一六號、二〇一一)でも「匡郭の上外に十數々數十葉ごとに中に數字を記した書耳がある」という形で言及し、これを持たない南京刊本を建陽で覆刻した際にこれが加えられた事例が複数あることを指摘していた。
- (7) 現代中國語音は異なるが、當時は刪韻と同音であったと思われる。
- (8) 秋胡は自分の妻だと氣付かず本氣で口説いた愚者として描かれるのが定番だが、本書では伍子胥に好意的な賢者とされ、妻と知りながら貞節を試すべくわざと口説いたことになっている。但し、結局妻は秋胡が自分を試そうとしたこと自體を恥じて自害してしまう。
- (9) 傳統鼓詞『左傳春秋』を改編したと謳う石印紅・章程整理『新編傳統評書 伍子胥鞭屍』(花山文藝出版社、一九八七)がそこで大團圓となつている。また、「伍員吹簫」雜劇も、楚を破つて平王の屍に鞭打ち費無忌を斬つた後で、浣紗女の母や漁翁の息子に報恩して終わる。
- (10) 大塚秀高「前漢書平話續集・全漢志傳・兩漢開國中興傳誌輯校本(試行本)並びに研究」(『日本アジア研究』第四號、二〇〇七)、田村彩子「佚書『七國春秋平話前集』の設定と内容に關する考察」(『中國古典小説研究』第二十三號、二〇二二)など参照。
- (11) 「却説」が行頭にある五十八例のうち一例は前の行から「次日、却説姬光……」と文が続いているので、「却説」が段落の頭にあるのは五十



七箇所である。また、「却説」で改行していない十例の中にも明らかに話の切れ目になっている箇所はあるし、逆に改行をしても話の切れ目などは看做し難い箇所も幾つかあるので、「却説」によって全體が幾つに分けられるかの判断は、人によって若干の差が出そうである。

- (12) 「全相平話五種」の残り二種では、『前漢書平話續集』は「却説」が五例のみと少なく、『秦併六國平話』は「却説」が皆無で「話説」を多用する。版式が異なり無圖の『新編五代史平話』も、「却説」は十例（各巻に零々三例）とあまり多くはない。なお、『新編五代史平話』は本文内では章分けをしないが、目録には則目が記載されている。また、刊本は傳わらず『永樂大典』に引用される形でしか残っていないが元代の平話に準ずる性格の『薛仁貴征遼事略』（『永樂大典』卷五千二百四十四所收）は、章分けはせず、「話説」六例と「却説」七例がある。
- (13) 他に「小人亡楚伍員也」となっている箇所が一例だけある。
- (14) 「吾乃亡楚伍員也」から續く會話の流れでこの臺詞が出て来る箇所が多いが、どちらか片方だけが書かれている箇所もある。
- (15) なお、前述の『新刻聯對便蒙圖像七寶故事大全』には、史書や經書に典拠を持つ由緒正しい故事に混じって、「子胥舉鼎」「魏徵斬龍」「三藏取經」といった通俗文藝出來の話も多數引かれている。
- (16) 道光十四年（一八三四）刊の『聖門十六子書』（東洋文庫等藏）母子書卷二も陳器『五寶故事』から同じ話を短く一條にまとめて引くが、話の順序に混亂がある。『孔聖全書』からの孫引きなのかもしれない。
- (17) 『文淵閣四庫全書』所收の四卷本に據った。他に『讀書齋叢書』所收の二十卷本もあるが、そちらの卷十八にも同文が見える。
- (18) 金代に作られた文字で、清代の滿洲文字とは全くの別物。
- (19) 例えば、李西亞「金代图书出版与受众需求的融合探析」（『吉林師範大學學報（人文社會科學版）』二〇一四年第二期）六二頁が「从这些书的

明刊本小説『新刻彙正十八國闢寶傳』の發見とその意義

书名可以看出，都是初级伦理道德教育方面的，应该是为女真字学校的儿童蒙教学而出版的书籍」としている。

(20) 愛新覺羅烏拉熙春『明代の女真人——『女真譯語』から『永寧寺碑記』へ』（京都大學學術出版會、二〇〇九）第一章參照。

(21) 想像を逞しくすれば、『女真字盤古書』及び『女真字孔夫子書』と『女直字孔夫子遊國章』も、明代の小説『按鑑衍義帝王御世盤古唐虞傳』や『新鏤孔聖宗師出身全傳』のような話を扱う『全相平話』シリーズに據ったものである可能性もあるかもしれない。

(22) 『女直字姜太公書』が二つ別々に著録されているのも、両者が同内容ではなく、例えばそれぞれが「姜太公出身全傳」と「姜太公東征全傳」というような巻首題の漢語の小説刊本の翻譯だったからなのかもしれない。その場合、「全相平話」そのものの翻譯ではなく、「全相平話」の系譜を引く小説刊本の翻譯だったことになる。

〔附記〕本稿は令和元年度東京大學卓越研究員課題研究「明代における通俗文學の發展と商業出版の伸長との相互作用の研究」並びに科學研究費若手研究「明末清初における官刻・家刻・坊刻それぞれの實態の研究」（一九K一三〇八七）の研究成果の一部である。なお、『新刻彙正十八國闢寶傳』の購入經費は、研究計畫書の經費の使途欄に「書籍及び有料データベースを購入豫定。これまでは必要があれば私費で購入することもあつた高額の古典籍の購入も、古書市場に研究上有意義な出版物があれば検討する」と書いて採擇され、古書市場の様子を見るべく全く支出せずに繰越を續けていた前者で全額を賄えた。この曖昧模糊とした支出計畫を認めて採擇して頂いたことに對し、この場を借りて厚く御禮申し上げたい。